

令和5年度  
学校評価結果報告書  
(年度末結果報告書)



朝鮮通信使 (ふれあいの広場)



修学旅行 (東京ディズニーランド)



市呉ランチ (クッキングコーディネーター室)



フロンティアⅡ全体発表会 (多目的ホール)

呉市立呉高等学校

令和5年度学校経営計画

令和3年度～5年度

校番	1	学校名	呉市立呉高等学校	校長氏名	小田 浩	全日制	本校
----	---	-----	----------	------	------	-----	----

1 教育目標

地域課題を発見し、その解決に貢献しようとする意識と、持続可能な社会の担い手として新たな価値を生み出す力を有する、心豊かでたくましい人材を育成する。

2 三つの方針

① 育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）

当たり前のこと（挨拶・服装整齊・時間厳守・清掃等）を高いレベルで実現できる生徒。  
自身が定めた目標の実現に向けて不断の努力ができる生徒。  
「自立」と「自尊」の精神を備え、高い貢献の意識を有する生徒。

② 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）

大学・就職等への進路選択に必要な教科・科目を効率的に学習することができる。  
興味・関心のある分野の教科・科目を重点的に学習することができる。  
普通科の教科・科目と専門科目を進路目標に従って自由に選択して学習することができる。

③ 入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）

「高き夢をいだけ そして 君が夢みた君になれ」という本校のスローガンに共感し、学業はもとより、部活動や課外活動にも積極的に取り組むことのできる、バランスのとれた基礎学力を有する生徒を、呉市内外から受け入れる。

3 中期（3年間）経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標	評価指標	目標値	実績値	
			初年度	次年度
希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。	第1志望達成率	85%	95.6%	83.3%
総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により、課題発見・解決能力を高める。	身に付けさせたい力の伸長に対する自己評価	1年60% 2年70% 3年80%	1年81% 2年75% 3年88%	1年65% 2年78% 3年83%
生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。	規範意識に対する肯定的評価	90%	99%	99%

【評価基準】

A: 目標を完全に達成した。 B: 目標を概ね達成した。 C: 目標をあまり達成できなかった。 D: 目標をまったく達成できなかった。

4 短期（本年度）経営目標及び行動計画等

中期（3年間）経営目標

(1) 希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
自律的学習習慣の確立	生徒手帳と学習時間調査による家庭学習の定着	Classiの学習時間入力状況	100%	74.9%	C	①65.9%②85.7%③71.7%の生徒が達成したが、100%にはまだまだ及ばないため。	進路指導
基礎的・基本的な学習内容の定着と活用能力の向上	授業における基礎的・基本的な知識・技能の活用	模試の偏差値50以上の生徒数	1年	国22% 数5% 英18%	C	1月進研模試の結果によると国数英総合で偏差値50以上の生徒は7%に留まっており、目標達成とは言えないため。	進路指導
			2年	国12% 数8% 英4%	C	1月進研模試の結果によると、3教科総合で偏差値50以上の生徒は3.3%と低いため。	
	定期考査作成を通じての作問能力の向上	想定平均点±5点以内の割合	80%	40.4%	C	1学期中間考査が45.7%、期末考査が40.6%、2学期中間考査が39.6%、期末考査が37.5%で達成率が目標値に達していないため。	教務
希望進路の実現	組織的進路指導体制の構築	第1志望達成率	85%	81.2%	B	現在進路未決定者13人が一般入試に挑戦中で最終的には達成見込であるため。	進路指導
	個別指導体制の強化	国公立大合格者数	12名	8名	B	年内入試の合格率は5割。国公立大学2次試験受験予定者4名であるため。	進路指導
授業改善の積極的推進	発問の工夫・ICT機器の活用を取り入れた授業展開	授業アンケート肯定的評価の割合	70%	75%	A	目標値を超えたため。	教育研究
		ICTに関する研修の回数	3回	2回	A	年間計画どおり実施のため。3月に3回目を実施予定である。	
業務改善による生徒と向きあう時間の確保	定時退庁の実施率向上と年休取得の推進	勤務時間外在校時間月平均45時間以内の教職員の割合	70%	52%	C	年間を通しての数値は達成できてないが、定時退校日である月曜日に意識して早めに帰る教職員が増えているため。	管理職

中期（3年間）経営目標

（2）総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により，課題発見・解決能力を高める。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
ESD・SDGsの視点を取り入れた教育内容づくりの推進	「産業社会と人間」ライフプラン策定，「フロンティアⅠ・Ⅱ」の体系的指導	意識調査の「身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている」の肯定的評価の割合	1年	1年	B	2・3年生は目標値に達したが，1年生が中間評価より4%上昇したものの目標値には達しなかったため。	教育研究
			60%	58%			
2年	2年	70%	77%	3年			3年
特色ある学校設定科目の教育内容の充実	「防災」選択者の「防災リーダー」としての育成	選択者の校内外での活動回数	3回	6回	A	自衛隊と2回，呉市と2回，消防署と2回連携して実践活動できたため。	教務
	「看護基礎」「福祉基礎」「子ども文化」「調理2」における専門機関とも連携した高度な教育内容の提供	専門機関等との連携回数	8回	11回	A	「呉学」は呉市と2回連携，「看護基礎」「福祉基礎」は基本的に広島文化学園大学と連携の上で運用。加えて，「福祉基礎」では呉市東部包括支援センターをはじめ，7事業所（計8回）と連携し授業を行った。また，家庭科の科目で1回外部と連携を行った。これらの理由による。	
生涯学び続ける意識の醸成	資格取得の促進	1種目以上合格した生徒の割合	50%	19.4%	C	1月末時点で439人中85人（延べ148）であり，目標値を達成していないため。	教育研究
	読書習慣の確立	年間10冊以上読んだ生徒の割合	10%	1年 14.8% 2年 5.2% 3年 6.9%	B	3年次生はフロンティアⅡで研究に使用した本を読書調査に書いていない生徒がいるため，数値が低くなったと思われる。現在8冊以上読んでいる生徒を入れると1年次17.7%，2年次生11.6%，3年次生11.0%で目標値を達成できる。	

グローバルに活躍する人材の基礎の醸成	姉妹校との相互交流によるグローバルマインドの向上	安樂高級中學等との相互交流の回数	3回	3回	A	朝鮮通信使再現行列訪問団（大韓民国プチョン市の高校）の来校による交流、米国ブレマートン市の高校・韓国キメ市の高校とのオンライン交流を行ったため。	総務企画部
	異文化理解促進のための交流の場の積極設定	異文化理解に繋がる実践の回数	3回	3回	A	1年次生での国際理解をテーマとするLHR、1・2年次生での「English Day」の実施に加え、第21回「国際交流フェスタ in くれ」に希望生徒が参加したため。	総務企画部

中期（3年間）経営目標							
(3) 生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。							
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
規範意識や社会性を高める	時間・期限への意識を高める	1日の遅刻者数	1.0人	1.30人	C	昨年度よりも0.10イント上がったため。	生徒指導
	ルールの意味を考え尊重する意識を高める	特別な指導の回数（携帯電話によるものを除く）	5回	10回	C	昨年度よりも特別な指導の件数が増加したため。	生徒指導
		生徒の規範意識に対する肯定的評価の割合	90%	99%	B	多くの生徒はルールを守っているという意識は持っているため。	生徒指導
生徒支援の体制の拡充	教育相談活動を充実させる	教育相談に対する肯定的評価の割合	90%	93%	B	教職員との信頼関係が構築されていると考えられるため。	生徒指導
	困り感のある生徒への具体的支援	全体研修や専門機関との連携、学年会等での協議を経て生徒・保護者にはたらかせを行った回数	3回	3回	B	困り感のある生徒は増加の傾向にあり、全体研修や学年会で連携して行っており、必要に応じてスクールカウンセラーと連携しているため。	
	部活動による学校生活の充実	部活動加入率	90%	86%	C	コロナ下の影響が続いており、加入率は目標を下回っているため。	生徒指導

部活動の充実により、活動実績を向上させる	適切な目標設定と計画的活動により部活満足度を高める	中国大会以上の大会等への出場、県大会ベスト8以上への進出、またはそれに準ずる成績を収めた部活動数	5 団体	5 団体	B	目標を達成したため。	生徒指導
		部活動への取組に対する肯定的評価の割合	85%	85%	B	加入率は下がっているが、部活動に参加している生徒の部活動への意識が高いため。	生徒指導
貢献の意識の醸成	ボランティア活動への積極参加と「学び」への連結	ボランティア活動への延べ参加者数	400 人	523 人	A	参加者の延べ人数が目標を上回り、130%を達成したため。（2月1日現在）	総務企画部
		年間1回以上ボランティア活動へ参加した生徒の割合	70%	51%	B	学年ごとの参加生徒の割合は、1年44%、2年46%、3年63%で、それぞれ目標値を達成できなかったため。（2月1日現在）	総務企画部

## 【評価結果の分析】

### <管理職>

- ICT化によりペーパーレスが進み、印刷・配付・保存等の事務的業務量の削減が図られている。しかし、部活動時間については、新型コロナウイルス感染症の5類移行によって制限が緩和され、土日や平日の勤務時間外における在校等時間が従前に戻りつつあり、8月しか目標を達成できなかった。項目9「先生から進路についてきめ細やかな指導を受けている」94.5%、項目10「学校生活や友人関係などの悩みや相談事などを親身になって聞いてくれる先生がいる」95.4%と肯定的評価が昨年度より上昇していることから、事務的業務量の削減が「生徒と向きあう時間の確保」につながっていると言える。

### <教育研究部>

#### 授業改善に向けて（授業評価アンケート結果より）

- 授業評価アンケートでは、年2回アンケートを実施し、第1回で最肯定の割合の平均値は72%、第2回では75%であった。3%の上昇と、個人や教科での意識的な取組の効果があったものと考えられる。

#### ICTに関する研修

- 4月5日と11月14日に実施した。4月5日では、iPad運用方法の共通理解や、これまで使われてきた校務運営システムでのショートカットの作成およびカスタマイズについて紹介し、業務の簡便化と時間短縮ができるようにした。11月14日では、情報モラルについて、近年の全国データの紹介や、授業で使用できる資料の紹介などを行った。3学期にもう1回実施する予定である。複数の先生方がICT機器を利用されており、研修の成果があったと考えている。

#### ESD・SDGs

- 1年次生が57.5%（中間53.7%）、2年次生76.6%（中間72.3%）、3年次生が88.3%（中間83.6%）と各学年とも肯定的評価を伸ばすことができた。

1年次生では、実績値が中間より少し伸びたが、目標を達成できなかった。前半ではSDGsの視



点で職場訪問に取り組みせたり、後半では食品ロスに関する小論文や各自のライフプランを書かせたりし、課題に対する解決策を考えることはできていたと思うが、それに向けての行動をしようとする意欲を持たせる指導が足りなかった。

3年次生では、中間評価の83.6%から4.7%、昨年度と比較しても5%近く上げることができた。今年度のゼミ担当者は初めてゼミを担当する教員が半数近くいたため、教育研究部としても、ESDやSDGsとの関連付けながら研究を進めるよう、きめ細かく指導に取り組んだ。全体発表会なども各ゼミの代表者が、高いレベルでの発表をすることができた。卒業論文の作成においても、進学先でも困らないレベルの「学びの作法」を身に付けられるように、ゼミ担当者並びに個々の生徒に支援を行っていた。それらが、肯定的な意見に繋がったと思われる。

### 読書活動

○ 現在、朝読書が実施されていないため、個人に読書習慣がついているかどうか数値に大きく影響した。本校では総合的な探究の時間（フロンティアⅡ）において、読書をすることは必須であるため、読書の習慣化は急がれる。

全体で10冊を達成した割合は8.73%（昨年度7.23%）である（1年次生20人、2年次生8人、3年次生10人）。昨年度はフロンティアⅡの参考文献を使用した3年次生のみが10冊の目標を達成（10.6%）していたが、今年度は3年生が6.9%に下がっている。図書室の貸出履歴を見ると参考文献として本を借りている生徒は76.5%いるが、読書調査の中でその本を書いている生徒は少なかった。実際に3年次生でフロンティアⅡの参考文献を図書室から借りている生徒数は1組25人（70冊）、2組25人（71冊）、3組34人（109冊）、4組27人（73人）の計111人（323冊）であった。どの学級も、1～9冊の本をフロンティアⅡの研究のために借りていた。個別にみると、8冊借りている生徒も読書調査には2冊としか記入していないなど、読書調査の際にフロンティアで参考にした本を書いている生徒が多かった。実際に読書調査には小説の題名を書いている生徒が多く、読書調査には趣味で読んだ小説を書くものと誤解している生徒がいると思われる。

10冊には到達しなかったが、8冊以上読破した生徒を含めると全体は13.3%（昨年度17.3%）である（1年次生17.8%、2年次生11.6%、3年次生11.0%）。図書室のPCによる貸出冊数（2月末現在）は1年次生が120冊（読書調査では677冊）、2年次生が257冊（同729冊）、3年次生が456冊（同565冊）となり、学年があがるにつれて、総合的な探究に資する本を借りている割合は多くなっている。

### <教務部>

○ 令和2年度から、定期考査の想定平均点と実平均点との差を±5以下にする取組についての分析を取り入れた。対象は、第1学期中間考査と期末考査、第2学期中間考査と期末考査の計4回である。第1学期中間考査は46科目中21科目で達成率は45.7%、第1学期期末考査は69科目中28科目で達成率は40.6%、第2学期中間考査は48科目中19科目で達成率は39.6%、第2学期期末考査は72科目中27科目で達成率は37.5%であり、全体では達成率40.4%であった。中間評価よりは0.2ポイント下がったが、この4年間の中で目標値に一番近く、教員一人一人が指導と評価の一体化を意識しながら授業を行っている成果と考えられる。1・2年の考査問題に関しては、「知識・技能」と「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」を分かりやすく明記するようになったので、生徒の実態把握がしやすくなってきたと感じる。しかし、目標値の80%には程遠く、さらに生徒実態の把握と授業方法の改善を研究していく必要がある。

○ 特色ある科目において外部との連携を行っており、専門的な知識を習得する機会を多く設定できている。しかし、昨年度から開講した「呉学」は、呉の魅力について伝えるために多方面と連携するような授業内容にしたいが、受講人数が多く移動が容易ではないため、外部との連携がうまくいかないことが課題である。

○ 資格取得については、1人の生徒が多数の検定に挑戦し資格を取得している反面、大半の生徒は検定試験を受けていないという実態がある。しかし、昨年度よりは検定試験を受けている生徒の増加が見られ、今後の呼びかけ次第では資格取得者がさらに増えるものと考えられる。

### <進路指導部>

○ Classiへの学習時間の入力について、月・火曜日で、生徒への声掛け・指導を行っている。中間まとめ時点の実績値77.6%から2.7ポイント数値を下げているのが実態で、特に1・3年次生の取組状況に課題が残る。また、今年度から取組を始めた『家庭学習時間定着期間』での1・2学期の学習時間の平均は、1年次生が132.2分、2年次生が106.3分、3年次生が130.5分となっており、目標値（平日120分以上・休日180分以上）を達成している割合は1年次生30.1%、2年次生24.3%、3年次生47.6%と、考査期間中にもかかわらず1・2年次に学習習慣が定着しているとは言い難い状況である。受験期だけでなく、高校入学時からの学習習慣の定着を図る取組が早急に必要である。

○ 最終評価指標として、1月実施の「ベネッセ総合学力テスト」を用いた。1年次生については、国

語と英語で偏差値 50 以上の生徒が 11 月から国語で 13 ポイント、英語で 10 ポイント上昇した。また平均点偏差値は、過去 5 年間のデータと比較すると国語が 2 番目、英語が 1 番目に高い値となっている。2 年次生については 11 月時点からどの科目も横ばい・下降状況にある。平均点偏差値は、英語・数学が過去 5 年間では 1 番目に高い値となっている。

- 希望進路の実現に向け、3 年次生の半数以上が年内に行われる入試に挑む傾向にある。年内の就職試験や大学・専門学校の総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜等での第 1 志望進路先への合格率は 81.2% と非常に高い。また、国公立大学進学希望者に対しても、個々の指導担当を決め、取り組んだ結果、総合型選抜・学校推薦型選抜を受験した 14 名中 8 名の合格を得た。個別対応を基本としながらも、生徒同士の学びの『輪』を広げる取組を今後も考えていきたい。

#### <生徒指導部>

- 現時点での遅刻状況は昨年度の数値より増加している (1.30 人)。基本的生活習慣に対する規範意識は定着しているが、遅刻に対する意識は低下しており、高止まりしている。一方、遅刻傾向の生徒には早朝登校による指導を実施しており、現在改善傾向にある。遅刻・欠席について始業式等の生徒指導講話で改善を促している。コロナ感染症の 5 類移行前の感染症に対する不安から遅刻・欠席数の増加の影響が残っていると考えられる。
- 現時点で特別な指導対象の事案は 10 件発生している。生徒の規範意識に対する肯定的評価は 99.8% を示している。全体的に落ち着いた学校生活が維持されているが、細かな指導を要する場合も増えており、生徒の意識との乖離が見られる。
- 教育相談に対する肯定的評価は、本年度 93% であった。カウンセリングマインドに対する教職員の共通理解が深まり、教職員間のコミュニケーションも図られ、組織的に取り組まれているケースもあるが、組織的な取組を充実させていくことが必要である。
- 部活動の各種大会もほぼコロナ感染以前と同様に実施された。本校も例年と同様に大きな実績を上げている。昨年同様コロナ感染症期間の影響を受け続けていると考えられ、部活動との共存の難しさを感じた。部活動加入率は昨年度に比べて微減したが、生徒の部活動に対する肯定的評価は 85% と高い。

#### <総務企画部>

- 本年度は 10 月に韓国京畿 (キョンギ) 道富川 (プチョン) 市の京畿国際通商高等学校の生徒からなる朝鮮通信使再現行列訪問団が来校し、音楽による相互交流をはじめ、プレゼント交換や記念撮影などで親睦を深めた。  
また、同じ 10 月には米国ワシントン州ブレマトン市のオリンピック高校とのオンラインによる交流を行った。(同市のセントラルキットサップ高校とのオンライン交流も予定したが、先方の都合で実施できなかった) 続いて 11 月にも韓国の慶尚南道 (キョンサンナムト) 金海 (キメ) 市の金海外国語高校とのオンラインによる交流を実施した。  
さらに、12 月には台湾基隆市の安樂高級中學からの要望を受け、創立記念日に合わせて生徒会執行部・各部活動による祝賀ビデオを贈った。  
新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行を受け、本校の国際交流も活性化した 1 年だった。
- ボランティア活動の参加生徒の延べ人数は目標を超え、130% の達成率だった。昨年度の達成率が 78% (3 月 1 日時点) だったことを考えると、ボランティア活動においても、本校生徒の状況がコロナ以前のありように戻りつつあることを示している。

### 【今後の改善方策】

#### <管理職>

- 定時退校日が徹底できるように呼びかけを強化する。各部活動において、顧問を中心に、短時間の活動であっても成果を上げられる部活動を模索していく。ICT 推進委員会及び業務改善推進委員会を中心に、ICT 化による業務改善をさらに推進する。業務改善が「生徒と向きあう時間の確保」につながるように、教職員の目的意識を高める取組を今後とも展開する。

#### <教育研究部>

##### 授業改善に向けて(授業アンケート結果より)

- 昨年度に引き続き、ICT 活用を前提とすることで研究授業を行った。通常の教室での授業も、目視での判断であるが、教室での授業の 8 割が何らかの形で ICT を活用し授業を行っている。今年度の目標提示→授業交流週間→授業評価アンケート→分析→公開授業→授業交流週間→授業評価アンケート



ート→分析→次年度へのP D C Aサイクルが生きていると考える。3月のまとめの研修で今年度の課題を共有し、しっかりと次年度の活動につなげていきたい。

#### ICTに関する研修

- 第3回は教育活動を行っていく中で、困ったことや必要だと思われることについて実施していく予定である。年度末に、一年間の中での疑問等を解消する機会にしたい。

#### ESD・SDGs

- 1年次生では、ライフプランの作成を通じて将来の職業や進路について考え、今の自分の課題を理解し、解決策を考えた。これからの高校生活で身に付けたい力を意識させ、解決に向けての行動ができるよう、いろいろな場面で呼びかけや授業展開の中で意欲を持たせるように指導する。一方、今年度も、感染症の拡大を防ぐため、3年次生のフロンティアⅡ全体発表会を見学できなかった。来年度は、研究における調査活動のノウハウや分析力、表現力の向上を意識してフロンティアⅠを行っていききたい。

2年次生では、本年度前半、呉市が抱える問題を考えるプロジェクトに取り組んだ。呉市が持つ問題とSDGsの関わりを意識させながら、呉駅前のデッキ広場の案を考え、校内発表に加え、代表者による外部発表も行った。また、地域活性に主眼を置き、神田神社例大祭の活性化や島しょ部への移住の促進について考えさせた。本年度後半は、来年度の個人研究に向けての計画を具体的に考えさせ、例年通り、計画立案自体が探究活動となるようにした。学校評価アンケートNo.14の肯定評価(76.7%)のうち、最肯定評価は1/2弱(31.2%)であり、目標値を上回っている。

3年次生は、卒業論文を作成する過程で、研究の広がりや社会とのつながり、ESDやSDGsとの関連を指導することで、様々な側面から考えるという視点を浸透させていくことができている。来年度も、本年度の成果を踏まえ、生徒に様々な側面や立場で物事を考えられるよう指導する。先行研究を活用し、アカデミックな視点で研究できるよう指導することができつつあるので、来年度も継続していきたい。

なお、生徒だけでなくゼミを担当したことのない教職員にもESD・SDGsの考え方とともに「学びの作法」を浸透させる取組を行っていききたい。そこで、来年度は、4月の担当者会で、研究の取り組み方や1年間のスケジュールリングの目当ての共通認識を図っていききたい。例えば、研究ゼミ内での中間発表(6月中旬)には研究論文の体裁を整えたレジュメの作成、ゼミ別発表会(10月中旬)までには調査や実践を終え、全体発表会(11月中旬)を目途に実践をまとめ考察に入るなど、時期に応じた達成目標をすべてのゼミ担当者に意識して指導するとともに、指導助言に行き詰まった場合の教育研究部の支援体制も今年度以上に整えていきたい。

#### 読書活動

- 本校の学びの集大成としての総合的な探究の時間(フロンティアⅡ)には、ネットの情報だけでなく、研究の参考文献となりうる読書が必須であるという意識を全教職員が持つ必要がある。そのため、各教科で1年間のどこかで図書室や図書資料を使うような課題発見解決学習の授業を設定していくように声がけをしていきたい。

また、受験の際、各教科の読解に限らず、小論文を書くためには語彙力や豊富な知識量が求められるため、読書の有用性を、図書便りを通じて広報していきたい。

#### <教務部>

- 予想平均点については、生徒の実態をしっかりと把握した上で想定しなければならない。そのため、小テストや単元テスト、パフォーマンス課題など授業内での生徒の理解度の把握に努め、定期考査問題について教科内で吟味する。また、各教科科目の予想平均点と実際の平均点の差の一覧を教科主任等に配付し、意識付けをする。
- 「呉学」では2学期に広島国際大学と連携を行い、より内容の濃いものにすることができた。また、福祉基礎の授業においては、7事業所と連携することができ、様々な角度から福祉について考えることができた。来年度につなげていきたい。
- 資格取得については、家庭科及び情報科の授業を選択している生徒が多くの特検を受けて合格している。さらに、外国語科では年3回の実用英語技能検定の受験機会がある。日本英語検定受験の声掛けをさらに増やすとともに、他教科においても可能な検定試験の受験機会を作っていく。また、折に触れて資格の重要性や生涯学習の必要性を生徒に啓発していく。

#### <進路指導部>

- 「自律的な学習者」の育成を目指し、今後も粘り強く指導を続ける必要がある。また、個々の学習

- 時間についても、教育相談等で各自の希望進路に合わせて確認・指導を行う取組を進めていきたい。
- 模試に対する取組について、授業改善や学年の学習意欲の意識付けの材料として、ぜひ3教科だけでなく、学年団とも連携して取り組んでいく必要がある。また、新学習指導要領に移行後初めての受験生となる現2年次生に対して、入試を始めとした進路に関わる変更等の情報を各教科・学年と共有し、よりよい進路実現を目指す授業・学校生活づくり等をしていく。
  - 担任を中心とした3学年団の先生方には、生徒の進路選択・決定において不利益にならない取組になるよう、引き続き細心の注意を払って入試事務を行っていただく。また、今後も生徒・保護者との連携を密に、丁寧で組織的な進路指導を行う。進路情報に関しても定期的に Classi や Google classroom を活用した情報提供を行う予定である。国公立大学進学希望者を増やす取組としては、現1、2年次生の学習の質を高めることと同時に、本校の恵まれた教育環境を存分に活用した『実績作り』を機会があるごとに生徒に勧めていき、早期に進路意識を高めていく取組が今後求められると考える。

#### <生徒指導部>

- 目標値である1日1.0名以下の遅刻指導を継続していく。遅刻、欠席、早退等に関する規程について再度共通理解を図り、指導を徹底する。保護者との確実な連携や学年や分掌との速やかな連携等を徹底する。また遅刻傾向の生徒に対しては、基本的な生活習慣や精神面へのサポート等を継続し、再発を防止する。
- 全教職員が生徒指導規程の共通理解のもと情報交換、情報共有を心掛け、多面的な生徒理解を図ることにより、組織的かつ継続的に生徒指導に取り組み、問題行動の未然防止に努める。そのため、共感的人間関係を基盤とした生徒への声かけを行ったり、生徒指導に係る研修会等を計画的に実施したりすることで、教職員個々の指導力の向上を図る。
- 計画的な部活動運営に対する共通理解を図るとともに、生徒の部活動に対する肯定的評価を更に高める。また、各種大会以外でも部活動に対する充実感を得られる取組を設定していく。

#### <総務企画部>

- 10月に第1回の国際交流委員会が開催され、同委員会が実働することとなった。2学期の発足であり、年度途中からの国際交流の取組は困難であると判断されたため、安楽高級中學との交流は来年度を期することとなった。  
来年度の9月下旬には、安楽高級中學の代表団が来日し、ホームステイや市呉祭への参加などによって、交流を深める予定である。実りある国際交流となるよう、呉市の関係部局とも連携しながら交流の計画を進めたい。
- ボランティア活動に参加する生徒は、3年次生に比べて、1・2次生の割合が低くなっている。総務企画部だけでなく、生徒指導部（生徒会担当）の協力も得ながら、ボランティアに関する積極的な啓発活動を行い、ボランティア活動に対する全校的な関心・意欲のいっそうの高まりを目指したい。

別紙:現状分析

外部環境	<p><b>O</b> (支援的要因)</p> <p>①小・中学校, 高等専門学校, 大学等が隣接している。                  ②PTAが学校に協力的である。                  ③市呉の存在が市民から注目されている。                  ④市内の各団体から支援を期待できる。</p>	<p><b>S</b> (強み)</p> <p>①総合学科の特性を生かし, 多様な選択科目を設定している。                  ②挨拶, マナー, 時間厳守, 服装等の生活規律が徹底している。                  ③地域・社会に貢献しようとする意欲が旺盛な生徒が多い。                  ④部活動が活発で, 多くの部が上位大会進出を果たしている。                  ⑤教育相談体制が整備されている。                  ⑥本校への進学希望者が多く, 中学生からの支持を得られている。                  ⑦「産業社会と人間」から「フロンティアⅠ・Ⅱ」に至る一連の取組が進路実現に有効である。</p>	内部環境	<p><b>「支援的要因と強みを生かす」</b></p> <p>○近隣の教育資源等の活用を促進する。                  ○PTAと連携し, 協働して教育内容を創造する。                  ○総合学科の特性とESDの研究指定の成果を生かして, 身に付けさせたい9つの資質・能力の育成を図ることにより, 生徒の進路実現につなげる。                  ○生徒の学力の向上, 規範意識や社会性, 奉仕の精神を涵養する指導を充実し, 市民等から誇りに思われる生徒を育成する。                  ○部活動の充実により, 自己肯定感を高めつつ, 活動実績へとつなげていく。</p>
	<p><b>T</b> (阻害的要因)</p> <p>①県立学校教員との人事交流が少なく, 教職員の年齢構成の偏りが解消されない。                  ②情報不足や入手の遅れ等のため県立学校と帯同した動きが困難な場合がある。                  ③生徒の多様な進路目標に対する対応力を高め切れていない。</p>	<p><b>W</b> (弱み)</p> <p>①高い目標を実現しようという意欲や態度を十分には育成できていない。                  ②一般入試で求められるレベルまで基礎学力を高め切れていない。                  ③家庭学習時間が少ない。                  ④多様な選択科目の開設に必要な選択教室や実験・実習室等が不足している。</p>		<p><b>「阻害的要因と弱みを克服」</b></p> <p>○校内授業研究を充実するとともに他校の公開研究授業等に積極的に参加する体制を整える。                  ○ESD・SDGsの視点を取り入れ「産業社会と人間」「フロンティアⅠ・Ⅱ」の系統性を高め, 学際的な深い学びを実現する。                  ○個別指導の徹底とその支援体制を構築し, 進路実現につなげる。                  ○学校の方針や情報等を積極的に発信する。                  ○様々な機会を捉えて生徒・保護者に進路情報を提供し, 低学年次から段階的に進路意識を高める。</p>

1 生徒の高い志や夢を実現する。

- 総合学科としての特色を生かした教育活動の充実を図る。
  - ・キャリア教育を柱に, 生徒一人一人が自立した社会人・職業人として将来を展望し, その実現のために必要な教科・科目を適切に選択できるよう, 教育課程を編成・実施する。
  - ・地域社会の担い手としての素養を高め, 持続的発展が可能な社会の構築のために行動できる人材を育成する。その実現に向けて教育活動の体系化・構造化を図り, 「地域課題解決型キャリア教育」のカリキュラム開発と実践を行う。
- 希望する進路を確実に実現できる学力を身に付けさせる。
  - ・「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき, 主体的・能動的で学習者基点の深い学びを促進する授業づくりを行う。
  - ・発問の工夫, ICT機器の活用, ESD・SDGsの視点を取り入れた授業改善を推進し, 生徒に自律的学習者としての意欲と態度を身に付けさせる。
- 教科学習や部活動の成果として, 各種大会・コンクール, 資格取得等で全国レベルの実績をあげる。

2 地域の誇りとなり得る高校となる。

- 生徒指導を徹底し, 自立した社会人としての規範意識や社会性を涵養する。
  - ・全教職員で生徒指導規程の共通理解を図り, 統一的な指導を行う。
  - ・学校生活において生徒指導の三機能を生かした指導を行う。
- ボランティア活動のさらなる充実を図り, 貢献の意識を醸成するとともに「学び」との連結を図る。
- 学校情報を積極的に発信し, 保護者や地域の期待に応えるとともに, 本校の教育力を生かして, 小・中学校教育の充実・発展に寄与する。
- 不祥事を許さない組織風土を醸成するとともに, 教育活動のあらゆる場面において, 生徒・保護者・地域から信頼される教職員の姿を示す。